

編集後記

- ・今年、の正月に、たまたま、田辺会長と学会の現状について少しく談話する中で、どうも「遺跡学」というのは正体不明気味な印象を持たれているのではないかという疑問を共有した。本会の出発点は、遺跡の保存と顕彰ということを目指して、今日どのように考え、取り組んで行くのかということにあったとして、それを「遺跡学」というときに、10年を経たこの辺りで、改めて確認しつつ、発信する必要があるだろう……ということ、取り敢えず、今号においてそのことを特集して、麻痺した感覚に活を入れようという発想に至った。折しも、今号は、昨年度の設立10周年記念大会の報告も掲載するので、特集のマッチングとして巧妙であるかのように見えるのが、また、ミソである。
- ・この夏、8月18日(日)から25日(日)までの8日間、国宝高松塚古墳壁画修理作業室の公開(第10回)及び特別史跡キトラ古墳石室の公開が行われ、その公開説明要員として手伝う機会を得た。1日450名を目途とした一般公開であったが、件の情報によると、定員3,600名に対して16,000名余りの応募があったとのことである。40年余り前、高松塚古墳壁画の発見は、少し妙な表現をすれば、開発旺盛な高度経済成長期において、広く文化財の「社会的地位向上」に大きく貢献した、いわば、シンボルであったといえる。このころのヨーロッパでの壁画修復の経験にも倣いつつ、1300年余りもその場所で生き存えてきたこの感動的の奇跡にも順って現地保存の方針が決定され、その環境を安定的に維持しようと保存施設が作られたものの、自然の理の下に劣化の進行を留めることは極めて難しかった。一方、この極彩色の古墳壁画に類例は他に無かったところ、いまひとつ30年前に発見されたのがキトラ古墳壁画であったが、壁画の描かれた漆喰面はその基盤となる石室石材から剥がれ落ちる過程が進行しつつあった。これらの古墳壁画を永く後世に伝えるための措置の在り方が改めて詳しく議論されるようになって10年余りを経過した今日、止まることなく劣化・毀損の過程にある文化財の保存の難しさは、一般にもよく普及するようになってきた。そのことを反映してか、僅かな時間であったものの、見学の機会を得た人々の面持ち、その幸運とともに稀有の感動を覚え、あるいは、難病治療の友人の見舞いに訪れた気持ちにも似ているように感じられた。その痛々しい様子を肌で直感し、心の底から、早く良くなりますように、そして、また元気な姿を見せてください……という真心にも触れた1日であった。(T.H)
- ・第10号では、平成24年度設立10周年記念大会(奈良)報告である「大和の世界遺産と遺跡」(特集1)と誌上構成の「『遺跡学』とは何か」(特集2)の2つの特集企画を設けた。
- ・特集1「大和の世界遺産と遺跡」は、平城宮跡資料館講堂において開催された平成24年度設立10周年記念大会(奈良)の、第1日[平成24年11月24日(土)]における冒頭3つの挨拶と2つの講演、第2日[平成24年11月25日(日)]における5つの報告、そして、討論[座長:館野和己]の記録を掲載した。この特集企画については、青木達司が大会運営(平成24年度)を担当し、菊地淑人が本誌掲載(平成25年度)を担当した。
- ・特集2「『遺跡学』とは何か」は、平澤毅が企画案を検討し、各方面との相談の上、さまざまに協力を得ながら担当した。冒頭に、日本遺跡学会10年の経過と現状について平澤が整理したほか、平成25年6月29日(土)の運営委員会において開催した座談会の記録を菊地の取りまとめにより掲載した。これに加え、論考Ⅰ「『遺跡学』と文化財保護の将来像」として3本、また、論考Ⅱ「『遺跡学』の声」として本会による7本を掲載した。
- ・投稿を募集した「研究論文」と「研究ノート」については、投稿の主題に専門の査読者による校閲及び編集委員による修正等の適否の確認を経て、「研究論文」1本につき掲載を決定した。
- ・「冒頭グラビア」と「遺跡の現場から」については、遺跡をはじめとするそれぞれの立場から様々な情報等を発信するものとして、「遺跡の現場から」には5本のご寄稿をいただいた。依頼に際しては、上記特集との関連に重点を置いた。
- ・「学界・行政情報」には、遺跡学に広く関連する学界及び行政の情報として、5本の記事をご寄稿いただいた。
- ・加えて、今日、日本遺跡学会誌『遺跡学研究』が、本学会員以外にも普及しつつあることを踏まえ、また、会員諸氏におかれても、本誌上で参照できるように、平成23年度(第8号)から、「入会のご案内」として、「日本遺跡学会設立趣意書」と「日本遺跡学会会則」、そして、設立総会以来の大会等の開催実績を掲載することとしている。
- ・表紙のデザイン/構成には中村一郎氏(奈良文化財研究所)のご協力を得た。
- ・なお、『遺跡学研究』も号数を重ねてきたところ、本棚に並べても迷い無く取り出せるよう、今号から背表紙にも号数を表示することとした。
- ・本誌の編集・校正等の総括については、平澤・菊地が担当し、各編集委員と連絡・協議の下に進めた。

本誌の構成・編集については、編集委員が幹事会及び運営委員会において各種企画の検討状況などを随時報告し、協議を行った結果を踏まえて進めた。関係各位には多大なご理解とご協力を賜ったこと、厚く御礼申し上げる次第である。

学会誌編集委員 青木達司・栗野 隆・菊地淑人・坂井秀弥・平澤 毅・増淵 徹(五十音順)

遺跡学研究 第10号 2013

発行日 2013年9月30日
発行者 日本遺跡学会
〒630-8577 奈良県奈良市二条町2-9-1
奈良文化財研究所 文化遺産部 景観研究室内
TEL 0743-30-6816 FAX 0742-30-6815
E-mail iseki-g@nabunken.go.jp
印刷所 能登印刷株式会社
